

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
（分担）研究報告書

青森県内の二次医療圏におけるがん拠点病院の役割に関する研究
研究分担者 松坂 方士 弘前大学医学部附属病院 医療情報部 准教授

研究要旨

青森県がん登録データを解析した結果、二次医療圏に拠点病院以外にがん診療を担う医療機関がない場合、肝臓がんの診療において拠点病院のキャパシティーを超えている可能性がある二次医療圏があった。

A. 研究目的

がん拠点病院は二次医療圏に1施設を目安として、主に主要5部位のがん診療を担っている。その一方で、医師不足や自治体病院の財政状況の悪化などにより地方ではがんを診療できる医療機関が集約化されている。そのため、がん拠点病院の役割が大きくなっている反面で、キャパシティーを超えた診療となることも懸念される。今回の研究は、青森県がん登録データを解析し、がん拠点病院が二次医療圏のがん医療に占める割合を年齢別、部位別で検討した。

B. 研究方法

平成 25-27 年青森県がん登録データを解析し、青森県内の二次医療圏におけるがん診療連携拠点病院ががん患者の診断に占める割合を、部位（胃、大腸、肝臓、肺、乳房）別、年代別等で比較した。

C. 研究結果

拠点病院が診断に占める割合は、二次医療圏内の拠点病院の有無に関わらず、高齢者ほど低かった。ただ、拠点病院以外でがんを診療する医療機関がない医療圏では他の医療圏よりも全ての年代で拠点病院が占める割合が高かった。

拠点病院でがんと診断された患者のうち、自身が居住する医療圏以外の医療圏で診断された（つまり、医療圏をまたいで受診した）患者の割合は、拠点病院以外にがんを診療する医療機関がない/少ない医療圏では高かった。今回の検討では、特に肝臓がんと肺がんでその傾向が顕著だった。

また、このような傾向は病期（上皮内・限局、領域、遠隔転移）では違いがみられなかった。

D. 考察

自身が居住する二次医療圏に拠点病院がある場合には、住民は基本的に拠点病院でのがん診療を

希望するものと考えられるが、今回の検討では高齢者では拠点病院以外で受療する割合が高く、治療内容によって医療機関を使い分ける（積極的治療以外では拠点病院を受診しない）可能性があった。その一方で、拠点病院以外にがんを診療する医療機関がない/少ない医療圏では医療圏をまたいで拠点病院を受診する患者の割合が高く、青森県では特に肝臓がんと肺がんでその傾向が顕著であり、拠点病院のキャパシティーを超えている可能性があった。

E. 結論

拠点病院は二次医療圏内の主要5部位のがん診療を担うとされているものの、全てのがん患者を診療することはおそらく不可能だろう。そのため、医療圏内では拠点病院以外にがんを診療する医療機関を含めてがん医療計画を立案する必要がある。また、そのためには拠点病院以外の医療機関のがん診療機能をあらかじめ明らかにする必要がある。

G. 研究発表

1. 論文発表
なし
2. 学会発表
なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし